

研究ノート

福祉実習前における学生の動機づけに関する研究

——実習前の支援のあり方について——

原 田 奈津子

(長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科)

A Study of the Student's Motivation before Social Work Practice:
On the Support to Student before Social Work Practice

Natsuko HARADA

(Dept. of Social Work, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University)

Abstract

In this paper, I investigate the student who is going to have training for becoming a social worker, and it verified about the motivation. It was found through this research that it was important preparations for social work practice that mentally and physically was obtained, and volunteer experience was gained, it was adapted for the university life, human relations were also kept good. Research showed that students who face the uneasiness about social work practice and dissolve it need the support depending on the stage of their motivation.

Key words

motivation, social work practice, support

要 旨

本稿では、社会福祉士になるための実習に行く予定の学生に質問紙調査を実施し、その動機づけについて検証を行った。そこでは、ボランティア経験を積み、大学生活に適応し、人間関係も良好に保ち、精神的にも身体的にも安定した状態で実習への準備をすることが重要であるという示唆を得た。実習を前にした学生においては、実習前の不安に向き合い、それを解消するために何をすべきなのか、また、実習に向けての動機づけを維持もしくは高めるためには何が必要であるのかを本人が自覚し、主体的に実習に取り組めるような場の必要性が示唆された。

キーワード

動機づけ、福祉実習、支援

1. はじめに

福祉における専門職の質と量の確保が求められる中で、今まで以上に養成校への大きな期待が課せられている。社会福祉士の養成においては、大きな変化として、新しいカリキュラムの導入が挙げられる。社会福祉士として、福祉の

実践現場のみならず、地域社会全体を対象としたより高度な専門職としての位置づけがなされている。

質の高い福祉専門職の養成において、現場実習の意義は新カリキュラム上でも非常に重要なものとなっている。従来の実習内容で特に高齢

者等の施設において行いがちであった介護などの実践ではなく、「相談援助実習」という名称のもと、相談業務ということに主に焦点が当てられている。それは、いかに利用者の生活を総合的に支援していくかということにつながっており、利用者のニーズを顕在化・潜在化に関わらず拾い上げ、つまり、いかにアセスメントし、支援の計画を立てて実践し、さらに評価していくのかといった一連の流れが実習の基盤となっている。

また、なんらかの問題を抱えていても援助を自ら求めることのない人々に専門職側が出向いて援助をするといったアウトリーチの力量形成も大きな課題の一つとして挙げられている。さらには地域全体の福祉をどうしていくかといったマクロ的な視点の強化もさらに実習における重要命題となりつつある。また、社会福祉士として、地域のみならず施設や機関全体のマネジメント、つまり運営や評価をする機能も社会福祉士として身に付けるべき事項であることから、実習中での学びが必要になってくる。

こういったカリキュラムや実習内容の変化は、社会福祉士として、より高いレベルでの実践力の滋養が福祉専門職として求められていることを示唆している。

しかしながら、充実した実習となるには、まずは何より学生自身の主体的な学びが不可欠となる。

変革の中にある現在の社会福祉士の養成であるが、「実習」を通して、その養成の現状を考えていくこととする。本稿では、まず研究としての積み重ねについて確認するために、先行研究を概観してみることとする。Cinii で「社会福祉士 実習」で検索したところ98件の論文が確認された(2011年11月検索)。他にも、今回のテーマとして取り上げる「動機づけ」に着目し、「実習 動機づけ」で検索したところ77件の論文が確認された(2011年11月検索)。さらに福祉分野の研究に絞るため、「実習 動機づけ 福祉」で検索したところ7件の論文があった。

実習や動機付けに関する研究については、保育や教育分野、そして看護の分野での研究が盛んに行われてきた。特に看護の場合、実習における学生の記録や実際の場面などからの分析が目立った。実習受け入れ先との連携による研究もみられた。福祉における実習の論文は増えてきているが、実習に関する研究において、対象として学生、すなわち実習生に関するものが多くを占めている。伊藤(2007)は、介護福祉士養成のための実習における学生のリアリティショックについて、利用者や職員とのかかわりの中での学生のショックについて分析している。また、そのリアリティショックについて学生が自ら考察することによって動機付けを高める可能性があることも示唆している。

社会福祉士の養成に目を向けると、川島ら(2007)は、児童福祉施設で実習した5名の学生の実習に対するモチベーションの変動やその要因について学生の記録から分析している。潮谷(2008)は、学生自身が、実習後のグループディスカッションを通して学生が自身の課題を明確化し、気づきを得ることの効果について触れている。飛永ら(2007)は、実習教育における個別指導の小集団化の取り組みについて、意欲の向上などにつながることを検証している。このほか、見学実習などの事前指導の実践、実習中における巡回のあり方などを研究しているものもみられる。

また、カリキュラム改編後の実習、すなわち相談援助実習においては、現在、以下の事項が課題として、抽出できる。

一つ目が、「養成校教員からの施設や機関の実習指導者への積極的・継続的な連携」である。今回のカリキュラム改編では、「連携」が大きなキーワードとなっている。養成校と実習受け入れ先との密な連携が不可欠である。実習プログラムの作成、実習後の巡回での指導、帰校日における指導などそれぞれの役割を果たしつつ、一緒に専門職を育てるというやりとりが求められている。

二つ目として、「職域拡大による多様な人材育成をめざし、さまざまな分野で実践できる力をつけられるような実習のあり方」が問われている。そこで一つの例として挙げるとすれば、児童分野での保育のみに偏らない実習プログラム構築である。

三つ目が、「教育のための利用者情報の開示のあり方」である。個人情報問題から、利用者の情報を実習生にみせないことが目立ち、本来の実習が行えていない場合もみられる。

まずは新カリキュラムに基づく実習内容の整備に向けて、養成校および養成校の実習指導担当教員、実習生、施設・機関の実習指導者の三者間での連携が大きな鍵であることがわかる。また、社会福祉士の実習内容についての見直しをなされ、より高いレベルでの専門性の研鑽が実習の中で実践されつつあるように思われる。

筆者（2008）の以前の研究では、福祉を学ぶことへのやりがいと将来福祉職に就く意向について、今後の福祉現場実習などを経て、学生の中でこういった変化がみられるのか見守ると共に、いかに学生の福祉へのモチベーションをあげるかが大きな課題であることを明らかにした。

よって、本研究では、新カリキュラムの下、これから社会福祉士になるための実習に行くことを予定している学生を対象とし、実習の成否を左右する重要な要素となる学生の動機づけについて理解すると共に、どのような支援が具体的に必要であるかを探ることとする。なお、本研究における「動機づけ（モチベーション）」については、福祉を学ぶことのきっかけや福祉をまなぶことのやりがい、福祉職へ就く意向などからみていくことにする。

2. アンケートに見るA大学の学生の社会福祉士実習前の現状

(1) 研究方法と対象

実習に向けての意識と現状を探るため、社会福祉士養成のための実習に行くことを希望して

いるA大学2年生に対して、2011年1月に質問紙調査を行った。回収したのは、欠席などで配布できなかった数名を除いた45名である。

調査は以下の項目からなる。

① 大学での学習

「現在、学習面はうまくいっていると感じますか」など、大学での学びに関する質問項目について「よく感じる」「時々感じる」「あまり感じない」「全く感じない」の4件法でたずねている。

② 自分自身や人との付き合い方

「現在、人間関係はうまくいっていると感じますか」「情緒面での安定度についての自信はどの程度ありますか」などの自分自身に関する設問や人のかかわりに関する設問について、「①大学での学習」と同様、4件法でたずねている。

③ 大学生活

「現在、生活全般はうまくいっていると感じますか」「憂うつで気分の落ち込みを感じますか」などの大学生活に関する設問について「①大学での学習」と同様、4件法でたずねている。

④ 福祉に関する動機づけと就職に関する意向

「福祉を学ぶことになった最も大きな要因」「福祉を学ぶことへのやりがい」「福祉職への就職意向」「就職で最も重視したいこと」等の項目を充てている。

⑤ 実習に関する項目

「実習予定分野」「実習に向けての不安」「実習に向けての期待」などの項目についてきている。

⑥ その他

性別、住まい、通学時間などのフェイス項目

や、「サークルや部活への参加」、「アルバイトの有・無」、「ボランティア活動」について質問をしている。

(2) 結 果

① 基本属性

本研究では、女性24名、男性19名、不明1名の44名を分析に用いた。対象者の住まいは、自宅生21人、一人暮らし17名、下宿等6名となっている。部活やサークルに参加しているのは26名で、約6割が参加していることになる。また、アルバイトをしているのは、31人と70%を超えている。この他、今なんらかのボランティア活動をしているのは14人と、全体の3分の1弱となっている。

表1の「福祉を学ぶきっかけとなった最も大きな要因は何か」との問いに、最も多かったのが「福祉や介護に興味があった」(38.6%)、次に「やりがいがありそうだった」(22.7%)、「資格が取れる」(13.6%)となっていた。

表1 福祉を学ぶきっかけとなった最も大きな要因

回答選択肢	人数	%
「福祉や介護に興味があった」	17	38.6%
「やりがいがありそうだった」	10	22.7%
「親や先生にすすめられた」	5	11.4%
「祖父母への介護の経験」	1	2.3%
「資格が取れる」	6	13.6%
「他にしたいことがなかった」	1	2.3%
「その他」	4	9.1%
計	44	100.0%

表2の「福祉を学ぶことにやりがいを感じているかどうか」については、「非常に感じている」「まあ感じている」が約8割、「あまり感じていない」「まったく感じていない」が約2割となっている。

表3の「今後福祉の仕事に就きたいかどうか」については、「非常にそうしたい」「まあそうし

たい」が合わせて約8割、「あまりそうしたくない」や「その他」として「わからない」といった意見も約2割みられた。

表2 福祉を学ぶことについてのやりがい

回答選択肢	人数	%
「非常に感じている」	7	15.9%
「まあ感じている」	28	63.6%
「あまり感じていない」	6	13.7%
「全く感じていない」	3	6.8%
計	44	100.0%

表3 福祉職への就職意向

回答選択肢	人数	%
「非常にそうしたい」	17	38.6%
「まあそうしたい」	18	41.0%
「あまりそうしたくない」	6	13.6%
「その他」	3	6.8%
計	44	100.0%

表4の「就職する際、最も重視したいことは何か」については、「人間関係がよい職場」(38.6%)、「自分の才能がいかせる職場」(34.2%)、「収入が多い職場」(15.9%)となっている。

表4 就職する際に最も重視したいこと

回答選択肢	人数	%
「収入が多い職場」	7	15.9%
「人間関係がよい職場」	17	38.6%
「自分の才能がいかせる職場」	15	34.2%
「実家に近い職場」	1	2.3%
「特に重視しているものはない」	2	4.5%
「その他」	2	4.5%
計	44	100.0%

② 実習に関する基本項目

表5にあるように、社会福祉士実習の配属予

定分野は、「高齢者福祉」(27.5%)が最も多く、「地域福祉分野(社協等)」(25.0%)と「児童福祉分野」(25.0%)がそれに僅差で続き、「障害者福祉分野」(17.5%)、「病院(医療)」(5.0%)の順になっている。

表5 実習予定分野

回答選択肢	人数	%
「地域福祉分野(社協等)」	10	25.0%
「児童福祉分野」	10	25.0%
「障害者福祉分野」	7	17.5%
「高齢者福祉分野」	11	27.5%
「病院」	2	5.0%
計	40	100.0%

表6の「実習にあたって最も不安に思うこと」については、「自分の福祉に関する知識や技術」(50%)と半数を占め、「利用者とのコミュニケーション」(22.5%)、「職員とのコミュニケーション」(12.5%)が後に続いている。

表6 実習への不安

回答選択肢	人数	%
「自分の福祉に関する知識や技術」	20	50.0%
「利用者とのコミュニケーション」	9	22.5%
「職員とのコミュニケーション」	5	12.5%
「自分の生活に関すること(遅刻や睡眠等)」	2	5.0%
「交通手段」	2	5.0%
「その他」	2	5.0%
計	40	100.0%

表7の「実習にあたって最も期待すること」については、「自分の福祉に関する知識や技術の確認ができること」(60%)で最も多く、以下、「利用者とのコミュニケーション」(30.0%)、「その他」(7.5%)、「職員とのコミュニケーション」(2.5%)と続いている。

表7 実習への期待

回答選択肢	人数	%
「自分の福祉に関する知識や技術の確認ができること」	24	60.0%
「利用者とのコミュニケーション」	12	30.0%
「職員とのコミュニケーション」	1	2.5%
「その他」	3	7.5%
計	40	100.0%

③ 大学生活の状況

表8にあるように、大学生活の状況を表す「学習面」「人間関係面」「生活面」の平均値を比較してみると、人間関係面は比較的、他の要素と比べて、低くはなっていない。学習面の平均値が少し高いようにみえる。

表8 主要項目平均値及び標準偏差

学習面……………	2.84 (0.68)
人間関係面……………	2.02 (0.79)
生活面……………	2.36 (0.86)

④ 「福祉を学ぶことのやりがい」に関する分析

「福祉を学ぶことのやりがい」と各項目についての関連を探るため、相関係数を求め、表9に記した。

「福祉職への就職意向」($r=0.778, p<0.01$)では正の強い相関がみられた。また、「自己尊重」($r=0.590, p<0.01$)、「生活面」($r=0.541, p<0.01$)、「規則正しい生活」($r=0.527, p<0.01$)、「人間関係面」($r=0.502, p<0.01$)、「ボランティア」($r=0.497, p<0.01$)、「情緒面での安定」($r=0.497, p<0.01$)、「学習面」($r=0.444, p<0.01$)、「健康への自信」($r=0.449, p<0.01$)、「実習への期待」($r=0.452, p<0.01$)、では正の相関が示された。

⑤ 「福祉職に就く意向」に関する分析

「福祉職に就く意向」と各項目についての関連を探るため、相関係数を求め、表10に記した。

「福祉職に就く意向」に関して、前述の「福祉を学ぶことのやりがい」以外でみると、「実習への期待」($r=0.553$, $p<0.01$)、「学習面」($r=0.505$, $p<0.01$)、「ボランティア」($r=0.464$, $p<0.01$)、「自己尊重」($r=0.465$, $p<0.01$)、「規

則正しい生活」($r=0.463$, $p<0.01$)、「生活面」($r=0.445$, $p<0.01$)、で正の相関が示唆された。

(3) 考 察

今回の調査結果で得られた結果と2008年に行った実習前の学生に対する同じ項目を用いた調査での結果を、調査対象者が異なるため単純な比較は難しいということはあるが、今回の調査対象者の特徴を掴むために比較しながら、考察をしていくことにする。

「福祉を学ぶきっかけとなった最も大きな要因は何か」との問いに、「福祉や介護に興味があった」(38.6%)、次に「やりがいがありそうだった」(22.7%)、「資格が取れる」(13.6%)となっていた。以前の調査(2008年)のときにみられた「親や高校の先生からの勧め」ということではなく、自発的に興味を持って福祉の道を自ら選択してきた学生が多いという印象を持った。

また、「福祉を学ぶことにやりがいを感じているかどうか」については、「非常に感じている」「まあ感じている」が約8割、「あまり感じていない」「まったく感じていない」が約2割となっている。これについて以前調査した時は、前者で約6割強だったことを考えると、現状に肯定的な学生が多いのではと感じた。

「今後福祉の仕事に就きたいかどうか」については、「非常にそうしたい」「まあそうしたい」が合わせて約8割、「あまりそうしたくない」や「その他」として「わからない」といった意見も約2割みられた。これも前回の調査で後者の層が約3割居たことを考えると、福祉への学びが就職に直結して捉えている傾向にあるのではないかと考える。

「就職する際、最も重視したいことは何か」については、「人間関係がよい職場」(38.6%)、「自分の才能がいかせる職場」(34.2%)、「収入が多い職場」(15.9%)となっている。これについては、前回の調査での順位と変化は見られない。

表9 相関係数(福祉を学ぶことのやりがい関連)

	福祉を学ぶやりがい
部活・サークル	0.307*
ボランティア	0.497**
学習面	0.444**
ゼミの集まりへの参加	0.354*
自己尊重	0.590**
健康への自信	0.449**
情緒面での安定	0.497**
リーダーシップ	0.306*
人間関係面	0.502**
規則正しい生活	0.527**
憂うつ	-0.387**
新聞やニュース	0.375*
生活面	0.541**
福祉の学びきっかけ	0.390**
福祉職就職意向	0.778**
実習への不安	0.358*
実習への期待	0.452**

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

表10 相関係数(福祉職に就く意向関連)

	福祉職に就く意向
部活・サークル	0.316*
ボランティア	0.464**
学習面	0.505**
自己尊重	0.465**
健康への自信	0.375*
情緒面での安定	0.338*
規則正しい生活	0.463**
スケジュール管理	0.337*
憂うつ	-0.308*
新聞やニュース	0.403**
生活面	0.445**
福祉の学びきっかけ	0.358*
福祉の学ぶやりがい	0.778**
就職で重視すること	0.316*
実習への不安	0.401*
実習への期待	0.553**

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

実習に行くにあたって最も不安に思うこととして、「自分の福祉に関する知識や技術」・「利用者とのコミュニケーション」・「職員とのコミュニケーション」を挙げている学生が大半であった。また、実習に行くにあたって最も期待していることとして、前述の不安として挙げられた項目について、逆に自らの確認ができるとして、楽しみにしている声も多かった。自由記述の中では、「新カリの学生への期待が大きいためやりがいはあると思う」などといった「やりがい」というキーワードを提示するものが目立った。

前回の調査時との単純な比較は、対象が異なるため難しい面もあるが、やはり新しいカリキュラムの下での学びの影響なのか、自分の意思で福祉を専攻しているという動機づけの強さが目立った。

このような状況の中、実習前の学生にとってどのような支援が必要なのか、「福祉を学ぶことのやりがい」に関する分析と「福祉職に就く意向」に関する分析から検討してみる。

まず、「福祉を学ぶことのやりがい」に関連要素として示唆されたのが、「福祉職への就職意向」、「自己尊重」、「生活面」、「規則正しい生活」、「人間関係面」、「ボランティア」、「情緒面での安定」、「学習面」、「健康への自信」、「実習への期待」である。次に「福祉職に就く意向」では、「実習への期待」「学習面」、「ボランティア」、「自己尊重」、「規則正しい生活」、「生活面」が関連を示唆されている。

上記の結果から言えることは、ボランティア経験を積み、大学生活に適応し、人間関係も良好で、精神的にも身体的にも安定した状態で実習への準備をすることが重要であるということであろう。

いかに学生の実習に向けての動機づけを維持・向上させるのか、また実習中、学生が動機づけを保ち、主体的な学びが可能になるための要件は何か、さらに検討することが必要となる。

3. まとめ—学生に対する実習前における支援のあり方

今回の調査から得られた結果として、やはり新しいカリキュラムの下での学びの影響なのか、自分の意思で福祉を専攻しているという動機づけの強さが目立った。本学における新しいカリキュラムでは、1年次の段階から相談援助演習や児童福祉論などの福祉の専門科目を履修できるようになっており、その他の初年次教育においても、福祉教育でよく行われている自己覚知に関する学びやキャリア教育などの要素も入ってきており、大学生活をどのように過ごし、さらに将来社会人としてどう過ごすのか、自分の人生について考える機会も多く提供されている。そのことから、学生が自身で判断できるような環境ができ、実習に向けての動機づけの高まりが比較的、維持・向上されているのではないだろうか。

ボランティア経験を積み、大学生活に適応し、人間関係も良好で、精神的にも身体的にも安定した状態で実習への準備をすることが重要であるということも調査から示唆された。

一方、受け入れ先である施設及び機関の実習指導者についてみると、実習指導者講習会も開かれ、その際には、新カリキュラムのもとでの実習内容やプログラムの立て方、指導法、また、スーパービジョンの設定など細かな講習がなされている。また、送り出す養成校側の実習担当教員についても要件が課せられており、講習会も行われている。両方の講習会では、共同作業としての実習を強く印象付けた内容になっている。そういった中、実習の主体である学生自身の主体的な学びがどのようになされているのかどうか、もう一度検証していくことが必要となる。

実習に行くまでの学習のあり方や、大学への適応などについて、個々へのサポートをしていくことや、全体としての実習に向けた準備を行っていくことが不可欠である。質の高い専門職の養成において、実習のシステムを養成校と

しても再検討していくことが求められている。学生への支援のあり方の一つとして、実習中、実習前後においても、福祉スーパービジョンを活用する必要があるのではと考える。そもそも福祉におけるスーパービジョンとは、専門的に優れた援助者（スーパーバイザー）が、初心者や問題を抱えた援助者（スーパーバイジー）の職務能力向上のために行う援助であり、専門家としての知識・技術を磨くと共に、一個人として、自己成長を図ることを目的としている。スーパービジョンは、援助者の援助技術と自己成長をより高めるものであり、困難な仕事における適切な処理能力を身に付ける教育の場ともなる。新しいカリキュラムの中では、実習中において、問題を抱えた実習生に対して、実習先の指導者や養成校の教員により、このスーパービジョンを行うように講習会の講習内容でも定められている。これを実習中でなくても、実習前後においても行えるような仕組みづくりが必要になってくるであろう。特に実習を前にした学生においては、実習前の不安に向き合い、それを解消するために何をすべきなのか、また、実習に向けての動機づけを維持もしくは高めるためには何が必要であるのかを本人が自覚し、主体的に実習に取り組めるような場の整備が不可欠であろう。

いかに学生の実習に向けての動機づけを維持・向上させるのか、また実習中、学生が動機付けを保ち、主体的な学びが可能になるための要件は何か、さらに検討することが必要となる。

本研究はあくまで1つの大学における限定的な調査であるためその点を考慮しなくては行けないが、今後の課題として、実習後に同じ対象

者で、福祉に関する学びへの意識や福祉職へ就く意向などを調査するなどの縦断的な研究を続ける必要があるように思う。そこから実習をめぐる学生への支援のあり方をさらに検討していきたい。

附 記

本稿は、2010年度における長崎国際大学社会福祉学科共同研究によって行われた実習に関する研究の報告の一部である。

参考文献

- 川島恵美, 川本健太郎, 藤之原綾, 峰島里奈 (2007) 「生活施設実習過程における実習生のモチベーション変動及び影響を与える要因：児童養護施設実習を経験した実習生の記録から」『関西学院大学社会学部紀要』第103号, 47-58頁.
- 伊藤健次 (2007) 「介護実習におけるリアリティショック—その様相と肯定的側面について—」『山梨県立大学人間学部紀要』第2巻 11-18頁.
- 原田奈津子 (2008) 「福祉現場実習前の学生への支援のあり方に関する研究—福祉専攻学生の大学生生活と意識に関する調査から—」『長崎国際大学論叢』第8巻 219-225頁.
- 原田奈津子, 高島恭子, 浦秀美 (2010) 「福祉分野における現場実習に関する現状と課題—実習生, 養成校, 及び実習先（施設・機関）の実習担当職員, 利用者間での連携—」『長崎国際大学論叢』第10巻 187-195頁.
- 潮谷恵美 (2008) 「「社会福祉援助技術現場実習」の事後学習における「課題アイデンティファイ」：実習の事後学習におけるグループディスカッションの質的分析を通して」『久留米大学文学部紀要 社会福祉学科編』第8巻.
- 飛永高秀, 井上修一, 大藪元康, 窪田暁子 (2007) 「社会福祉援助技術現場実習スーパービジョンの研究（その2）—個別指導の小集団化の取り組みとその効果—」『中部学院大学紀要』